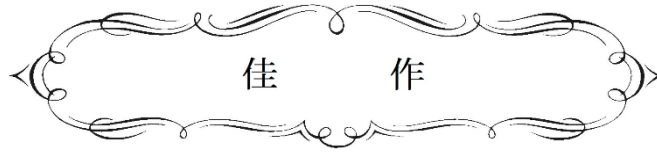


建設系高校生による「建設業に対するイメージアップ」作文の部



「暮らしやすい町をめざして」

愛知県立稲沢高等学校 農業土木科 2年
木村 彪 太

私は高校卒業後、市役所の建設・土木職員になりたい。そう思ったきっかけは、私が幼いころ駅前の道路はひび割れたところが多く、たくさんの人が歩きづらそうにしていたが、最近工事が終わりとてもきれいに修復され、段差や手すりのバリアフリー化が進んでいると感じたことだ。そこで、これからの工事がどのような仕事内容なのか調べてみた結果、市役所の都市計画課が中心となり、市民のために都市計画を考え、建設業者の方が施工していることを知った。そして、人々が何気なく暮らす日常を支える仕事に私は憧れをいだき始めた。現在、街中にはバリアフリー化された場所や建物が多くなってきたが、まだまだ完全に、暮らしやすい環境が整備されているわけではないため、人々が暮らしやすい街づくりを私自身が計画したいと考えた。そして、高校は、土木の専門科目がある、稲沢高校の農業土木科に迷わず進学した。今、私は高校生活の中で二つのことを学んでいる。

一つ目は、設計製図だ。設計製図は図面にとらえるのではなく、実際の構造物を想像して図面を描くことが大切で、様々な線の種類や書き方、線の濃さをそろえることなどを学び、図面を描くことでその構造を理解し、設計することの大変さと難しさを学ぶことができた。

二つ目は、測量実習だ。実習では、様々な器械の使い方や操作方法の複雑さに驚き、距離や角度を測り計算し、閉合誤差を精度内に収めることができた時は達成感を感じた。また、平板測量を実習で行っており、先生からある時、「平板測量競技会という競技会があるからやってみないか」と声を掛けられ、技術の向上を目指し、全国大会で「最優秀」を取ることを目標に、仲間と共に平板測量競技に力を入れた。

毎日全力で練習をした。頭の中は、平板測量競技で「最優秀」を取ることに一色だった。そんな日々の練習により、精度が上がり、練習で満点を出すことも増えてきて、次第に自信がついてきた。

県大会の当日、事件が起きた。それは競技直前のことだった。巻尺が絡まり、レバーが動かなくなった。新しい巻尺が渡され、私達の「失格」が確定した。大会直後の私は、絡まった巻尺へ、勝てなかった悔しさを押し付けた。だが巻尺に怒ったところで何も変わ

らないと気付いた時、ふと我に返り冷静になった。その一方で私は、先生から告げられた「失格」という言葉を、一生忘れないと思った。その悔しさで何日も学校生活に集中することができなかった。

しかし大会後、指導していただいた先生が、「競技開始前に『失格』と分かっていたとしても最後まで動揺せずによくやり切った。」と励ましてくださった。その言葉に、自分の努力が報われた気がした。心が温かくなった。私はこの経験を通して、たくさんの人に支えられ、人の温かさに触れることができた。仲間と一つのことを成し遂げた充実感があった。

その後、出前授業で矢作建設工業の紀伊さんのお話を聞く機会があった。私の中の建設業のイメージは、寡黙で堅苦しく怖いものだった。だが、お話を聞いて、建設業の方は「一人ひとり仕事に対して真剣で責任感を持ち、人との繋がりを大切にしている」と知った。一人では不可能なことでも、仲間と取り組むことで可能になる。そのため、人との繋がりは働く上で重要で、建設業で働く人たちは特にそのことを大切にしていると思った。

この秋には、建設会社ヘインターンシップの研修に参加する。建設業界の人の仕事に対する真剣さや誇り、技術力、人とのつながりを自分の目で見て、耳で聞いて、手を動かして、学ぼうと思う。建設業では、一つの工事を通して、多くの作業員の方々の力が集まることで一つのものが造られる。その橋渡しをする役目が、建設・土木職員だと考える。

パラリンピックを見て驚いた。様々な障害の方がおられることを目の当たりにしたのだ。ふと街を見ると、色々な障害の方に対応できる施設、設備は整いつつあるが、まだ利用者全員にやさしいとは言えない。その人たちのためにも、少しでも暮らしやすい街づくりをしたい、より一層、建設・土木業の公務員になりたいと強く思った。

今後は残り一年半の高校生活を大切にして、測量士補や土木施工管理技士などの資格取得やCADを使った設計、より精度の高い測量技術の習得に努めていく。そして、市が目標としている「誰もが、ずっと暮らし続けられるまち」に参加し、社会の発展や充実に貢献できる市役所の土木職員に私はなると約束します。